

向上

KOJO HIGH SCHOOL



待望の新グラウンド完成 「騎虎」で頂点を目指す

6月、新グラウンド「向上令和グラウンド」が完成し、新しい練習環境が整った。昨秋の悔しい逆転負けを糧に、冬場は筋力アップに励んだ。チームの持ち味である組織力で独自大会を戦い、神奈川の頂点に立って向上の野球を見せ付けたい。

文・写真／武山智史



**新しい練習環境に変わっても
前グラウンドでの精神は
忘れない**

放課後、練習着姿の野球部員が学校前にある小田原厚木道路を渡り、「向上令和グラウンド」に小走りで行っていき。今年6月、待望の新グラウンドが完成。全面人工芝で中堅120メートル、両翼95メートルのフィールド。バックネット近くには「KOJO」の文字が施されている。スタンドも設置され春、秋のブロック予選の会場としても使用される予定だ。ライト後方にはブルペンも併設されており、神奈川の高校野球部でもトップクラスの施設となっている。前グラウンドではできなかったフリー打撃や実戦形式の練習が可能となり、今まで以上に練習の幅が広がった。

その一方で、これまでの環境で取り組んできた精神も忘れてはならない。平田隆康監督は言う。「限られた環境の中、反骨心を持って団結してきたのが向上野球部のスタイル。環境が変わっても、前グラウンドで培ったこの気持ちはずっと持ち続けていきたいですね」

前チームからエースとして登板してきた松村青が主将となり、新チームは始動。しかし、地区ブロック予選では4番を打つ三崎剛が肩を脱臼。松村も県大会1回戦で右手首を負傷と中心選手にケガが相次いだ。そんな苦しい中で投手のエアアン・リンが台頭。「秋季大会の収穫はエアアンが出てきたこと」と平田監督が語るように、松村に次ぐ存在となった。県大会4回戦



スコアボードにはチームのスローガン「ALL OUT」の文字

では立花学園と対戦。白井敬悟、エアンの投手リレーで相手打線を封じると、8回表には野手として出場した松村が先制ソロを放ち試合の均衡を破る。9回表には2死1、3塁の局面で松村がマウンドへ。しかし四球を許し満塁とされると、逆転打を浴びるなど4点を失い敗れた。あと1人の場面からひっくり返され、チームには勝負どころで勝ち切る強さが課題となった。大会後の9月下旬には主将が松村から正捕手の福島瞬歩に代わり、新たな体制となった。

「秋季大会を通して感じたのは、チーム全体で体が小さいこと。体重や筋力アップが秋以降のテーマでした」と福島は語る。秋以降は春を見据え体を大きくすることに主眼を置いた。トレーニング面ではスポーツメーカーが定期的に実施する8種目の筋力測定で、チームの平均を合計900キログラムに目標を設定。各自が意欲的に取り組んだ。



打線を引っ張る4番打者の三崎剛



新しい練習環境となり、実戦練習を多く重ねる

ミーティングの回数を増やし「秋の悔しさをもう一度思い出し、春にしっかりとやる」とチームの目指すべき方向を定めた。練習でも主体的に行動する場面が多くなり、平田監督は「レギュラークラスのメンバーに自覚が出てきましたね」とその成長を挙げる。

シーズンを目前に良い流れができてきた中で、コロナウイルス感染拡大の影響で休校期間に突入。学校独自の連絡アプリで野球部内のグループをつくり、連絡を取り合った。他にもWeb会議ツールのZoomを使い、各グループでミーティングを重ねた。チームで共有したい情報があれば、グループリーダーを中心に情報を発信。各自が練習再開に向け準備した。だが5月20日、夏の甲子園および夏の地方大会の中止が発表。その2日後には

Zoomでミーティングが行われた。「監督は文字ではなく、言葉で伝えたいだろうと思いました。僕らにとっても大事なミーティング。気持ちこそそろえました」と福島が語るように、3年生全員が学校指定の紺のポロシャツで参加した。その光景に平田監督は「鳥肌が立ちました」と振り返る。3年生は夏の大会中止をどのように受け止めたのか。福島は言う。

「正直、何をモチベーションにすればいいのか分からなかったです。野球は高校までと考えているメンバーは悔しくて、どうすればいいか分からない状態でした」

その後、代替大会の決定や段階を経た練習再開で、チームが再び動き始める。2月以来、久しぶりの練習に今までは違う感覚があった。「みんなと

同じ空間で思い切り声を出して……、すごく楽しかったです」と福島は語る。平田監督がチームのキーマンに挙げたのは秋以降、更なる成長を遂げたエーアンだ。ひと冬を越えて体重が増え、ボールの威力や体幹の強さが備わり松村と背番号1を争う。代替大会では勝ち上がることにベンチ入りメンバーを入れ替え、3年生が一人でも多くベンチ入りできるような臨む。今回、チームで作成したTシャツに記された文字は「騎虎」(きこ)。福島はその意図をこう説明する。

「スピードに乗ったら離れられないじゃないですか。そんな気持ちでそのまま突っ走る感じですよ」

「騎虎」の文字通り、44人の3年生が神奈川の頂点へ加速していく姿を思い描いている。

Pickup Player

松村青

(3年生/右投左打/投手)

挫折を乗り越えて 信頼される投手に

僕は1年生の頃からメンバーに入らせてもらっています。メンバーに入れたかった先輩たちの重みや責任感、他の選手よりも持っていると思います。その思いをこの夏に発揮したいですね。

昨秋の大会後、9月下旬の練習試合では外野へ向かうときの態度を指摘されたり、登板したときに一人相撲を取ってしまった。僕が周囲に声を掛けづらい雰囲気をつくっていたんです。その後、「下から這い上がって来い」とCチームに落ち、同時にキャプテンも僕から福島に代わりました。

今思えば、自分の中で「何とかやる」という気持ちがあったのかも、悲しいという気持ちがあったのかも、悲しいという気持ちがあったのかも、自分の弱い部分が3年夏の直前でなく、あの時期に気付いたのは良かったと思います。これまでは僕が一人で先頭に立ってやってきましたが、同じ投手のエーアンが伸びてきました。今

はエーアンの方が上だと感じます。初めて自分に競争心が芽生えてきて、この夏はエーアンとの競争に勝ちたいという思いが強いです。

休校期間中、1月から毎日続けてきた柔軟やブリッジ、自分の体を使いこなすためのトレーニングを重ねてきました。練習以外では自分の心を強くしたいと思いい、毎日読書に励みましたね。特にビジネス書を読むことが多く、面白かったのは孔子の「論語」と福沢諭吉の「学問のすすめ」の現代訳の2冊です。昔の本ですが、現代に生きる心の持ち方や礼儀について書かれていて、とても興味深かったです。

今は打者の方でチームに貢献していますが、主となるのはやはり投手。再び背番号1を付けるだけでなく、チーム全体から信頼される存在を目指したいです。卒業後は大学で野球を続ける予定ですが、今のままでは埋もれて終わってしまう。もっと大人になって自分で考えてやらなくてはと考えています。

